

宮崎県内出土の底部貫通孔土器集成

石塚 啓祐
(宮崎県埋蔵文化財センター)

1 はじめに

筆者が発掘調査を担当した陣ノ元遺跡（宮崎市熊野）では、旧石器時代から近代までの遺構・遺物が出土し、長きにわたる人々の生活痕跡が発見された。その中で、弥生時代後期後半～古墳時代前期の集落の様相として、竪穴建物跡（間仕切りをもつ建物を含む）や貯蔵穴、掘立柱建物跡（独立棟持柱を有するものも含む）等の遺構とともに、土器（甕・壺・高坏・器台・鉢等）、石器（石鏃・台石・敲石・石錘等）、鉄器（釣針・袋状鉄斧・鉄鏃等）が出土した。その整理作業を進める中で、底部に棒状工具による貫通孔を有する土器が目につき、全破片を精査した結果、最終的には7点確認した。全国的にも、底部に穿孔がある土器（祭祀との関係において底部を意図的に破壊しているもの）や有孔土器に関する研究等はあるものの、底部に貫通孔を施した土器に関して触れている文献等は発見できなかった。発掘調査報告書においても「底部に穿孔がみられる」等の表現のみが記載されている例が多い。そこで、今回、県内の底部に貫通孔を有する土器の分布や器形の特徴、時期等などを探るべく、集成を行った。

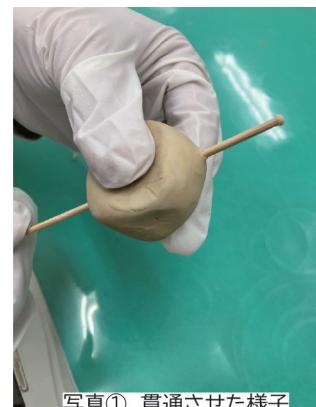
本稿での対象遺物は、「宮崎県内で出土したもののうち、底部に横方向の穿孔（貫通孔）が施され、土器内面には影響を受けていないもの」（以後、底部貫通孔土器）とし、宮崎県内発掘調査報告書に掲載されている資料及び本センターで報告書未掲載で遺物登録されている資料をもとに集成をおこなった。

2 穿孔方法の実験

穿孔は土器焼成前に施されている。そこで、焼成前の粘土（胎土）に棒状工具で穿孔する際、孔の形状にどのような痕跡が生じるかの実験を試みた（写真1）。

まず、写真①のように棒状工具を粘土に貫通させ、そのまま真っすぐ抜き取る（穿孔法A）と、挿入した側の孔は、写真②のように粘土が吸い込まれるように窄み、反対側の孔は、山状に盛り上がる（写真③）。

一方、棒状工具を貫通させた後、挿入口の方に向かって引き抜く（穿孔法B）と、挿入口との反対側は写真③のような山状の盛り上がりは見られない（写真④）が、挿入口側には、抜き取った際にできる工具の痕跡が見られた（写真⑤）。両側から穿孔している場合（穿孔法C）には、写真⑥のような痕が両方の孔口部に見られることになる。



写真① 貫通させた様子



写真② 挿入口側



写真③ 挿入口の反対側



写真④ 挿入口の反対側



写真⑤ 挿入口側

写真1 棒状工具の挿抜による孔口部の様子

このような実験結果をもとに、実物や遺物写真のある資料に関して、孔の形状にも注目して観察した。なお、今回の実験結果は一つの事例として考えており、それ以外の方法も検討していく必要がある。

3 県内出土の個体別様相

宮崎県内において、底部貫通孔土器の出土例は16遺跡27点の出土を確認した（第1図、第1表）。ここでは、個体別にその特徴や器種、時期等について報告書の記載を参考に示す。また、実物を観察できたものについては、孔の形状も記した。

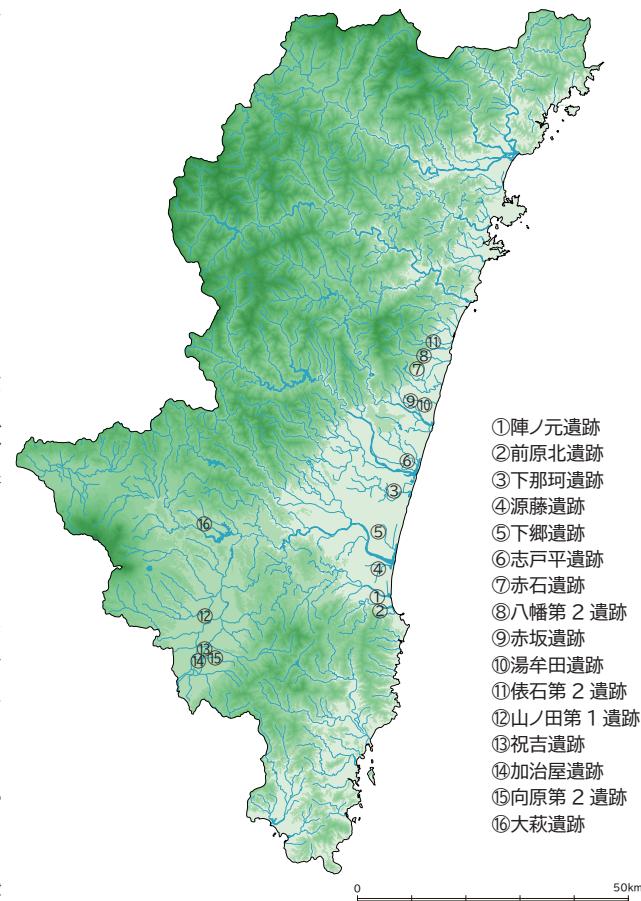
1～7は陣ノ元遺跡（宮崎市）から出土したもの（1～3は竪穴建物跡、4～7は包含層）で、いずれも古墳時代前期のミニチュア土器（1～3は壺型、4・7は鉢型、5・6は器種不明）である。内外面ともにミガキやナデを施し丁寧に整形している。孔径は2～4mmの範囲で、尖底状に突出した箇所や円盤状底部に横方向の貫通孔がある。1・2・4

～6は、孔口が写真④・⑤のようになっており、穿孔法Bと思われる。3・7は摩滅により不明である。

8は陣ノ元遺跡から南東に1kmほど離れた場所にある前原北遺跡SC38から出土したミニチュア壺の底部である。報告書未掲載だったため、今回新たに図化したものである。前原北遺跡・陣ノ元遺跡は間仕切りをもつ建物や建物内貯蔵穴を有するなど共通点も多い。円盤状底部に孔径2mmの貫通孔を施す。孔口は写真④・⑤のようになっており、穿孔法Bと思われる。また、同一工具（先細りのもの）による未貫通の穿孔も施される。

9～12は、下那珂遺跡（宮崎市）から出土したもの（10・11は竪穴建物跡、9・12は包含層）で、10～12は報告書未掲載のため初出である。出土遺構の時期から判断すると、いずれも弥生時代後期中葉～終末期のものと推定される。9は小型壺で、内外面をナデにて丁寧に調整している。円盤状底部に孔径4mmの穿孔があるが、X線画像から、貫通しておらず、両側から先細りの工具で穿孔しているのが分かり、両方の孔口にも写真⑤のような工具痕が見られるため、穿孔法Cと思われる。10は小型土器の底部で、外面はヘラミガキを施し、黒斑も見られる。円盤状底部に孔径2mmの貫通孔を施す。孔口は写真④・⑤のようになっており、穿孔法Bと思われる。11はミニチュア壺の底部である。外面はミガキを施し、黒斑も見られる。内面は工具ナデを施し、炭化物の付着も確認できる。円盤状底部に孔径2.5mmの貫通孔を施す。孔口は写真④・⑤のようになっており、穿孔法Bと思われる。12は、壺型の小型土器である。球状の胴部を呈し、内面はナデ後にユビオサエを施し、薄い黒斑も見られる。円盤状底部に孔径3mmの貫通孔を施す。

13は源藤遺跡（宮崎市）の21号住居跡（5世紀末～6世紀前半）から出土した壺型土器である。1・12のような球胴を呈し、器高は9.0cmと小型である。円盤状底部に孔径2.5mmの貫通孔を施す。孔口の形状は未確認である。



第1図 底部貫通孔土器の出土遺跡分布

番号	分布図 番号	遺跡名	市町名	出土位置	器種	底部形態	法量(cm)	孔径 (mm)	穿孔法	参考文献 番号	頁	掲載 番号	備考 (報告書本文所見等)	時期
1	①	陣ノ元	宮崎市	2号竪穴住居跡	ミニチュア壺	円盤状平底	底径:1.4	4	B	⑬	101	237	外面ヘラミガキ/内面ナデ	古墳前期
2				3号竪穴住居跡	ミニチュア壺	平底	底径:1.4	2.5	B		103	330	内外面ナデ	古墳前期
3				6号竪穴住居跡	ミニチュア壺	円盤状平底	底径:1.6	2.5	-		107	428	内外面丁寧なナデ/外面に黒色付着物	古墳前期
4				B7Ⅱ	ミニチュア鉢	丸底	底径:1.0	2	B		121	746	外面ハケメ/内面工具ナデ	古墳前期
5				C6Ⅱ	ミニチュア (壺or鉢)	円盤状平底	底径:2.3	2	B		122	778	内外面ナデ	古墳前期
6				C7Ⅱ	ミニチュア (壺or鉢)	円盤状平底	底径:3.1	3	B		123	809	内外面ナデ	古墳前期
7				D6Ⅱ	ミニチュア鉢	脚状	口径:6.4	4	-		123	822	外面工具ナデ/ユビオサエ	古墳前期
8	②	前原北	宮崎市	SC38(土坑)	ミニチュア壺	円盤状平底		2	B	⑧	-	未掲載	不明	
9	③	下那珂	宮崎市	B地区包含層	小型壺	円盤状平底	底径:2.3	4	C	⑫	127	750	内外面ナデ/未貫通	後期中葉～終末期
10				32号住居跡	小型土器	円盤状平底	底径:2.1	2	B		-	未掲載	外面ヘラミガキ/外面に黒斑	後期中葉～終末期
11				53号住居跡	ミニチュア壺	円盤状平底	底径:3.4	2.5	B		-	未掲載	外面ミガキ・黒斑/内面工具ナデ、炭化物付着	後期中葉～終末期
12				包含層	小型土器 壺	円盤状平底	底径:1.7	3	B		-	未掲載	外面ナデ後のユビオサエ/外面に薄い黒斑	後期中葉～終末期
13	④	源藤	宮崎市	21号住居跡	甕型土器	円盤状平底	口径:6.0 底径:2.4 器高:9.0	2.5	-	⑤	49	4		浄土江遺跡第1期(5C末～6C前半)
14	⑤	下郷	宮崎市	竪穴状遺構25	ミニチュア鉢	脚状		2	-	⑥	47	119	内外面ミガキ/外面にスス付着	石川編年V期(後期前葉～後葉)
15	⑥	志戸平	新富町	A5	鉢	円盤状平底	底径:2.8	4	B	⑪	12	46	内外面ナデ	不明
16	⑦	赤石	川南町	D3Ⅲ	甕	円盤状平底		6	B	⑭	71	458	内外面ナデ	中期～後期初頭
17	⑧	八幡第2	川南町	竪穴住居跡7(床)	小壺	円盤状平底	口径:7.5 底径:2.7 器高:7.5	2	B	⑩	26	81	内外面ミガキ	後期後葉
18	⑨	赤坂	川南町	3号周溝状遺構	小型壺	円盤状平底	口径:5.6 底径:2.3 器高:9.0	4	B	⑩	80	56	外面工具後指ナデ・黒斑/内面丁寧な指ナデ	後期後葉～終末期
19	⑩	湯牟田	川南町	竪穴住居跡5	鉢	円盤状平底	口径:5.6 底径:1.2 器高:5.4	5	B	⑯	84	154	内外面ナデ	後期後葉～終末期
20	⑪	俵石第2	都農町	不明遺構(SZ1)	鉢	脚状	底径:4.9	5	C	⑮	103	269	内外面工具・指ナデ	終末期前半
21	⑫	山ノ田第1	都城市	B-1	ミニチュア壺型土製品	丸底	底径:0.8	3	B	⑨	16	141	内外面ナデ/外面に丹塗り	終末期～古墳前期
22	⑬	祝吉	都城市	7号住居跡	鉢型	丸底	口径:2.7 底径:0.9 器高:3.3	4	-	②	15	12		終末期
23				7号住居跡	鉢型	円盤状平底	口径:8.4 底径:3.3 器高:6.4	4	-		15	16	外面ナデ	終末期
24	⑭	加治屋	都城市	D-2	蓋か	円盤状平底	底径:2.3	4	-	③	19	43	外面ハケメ/内面ナデ/蓋か	後期後半～終末期
25	⑮	向原第2	都城市	7-C	ミニチュア (壺or鉢)	尖底		2	-	④	27	129	内外面ミガキ/天地不明	後期後半～終末期
26	⑯	大萩	小林市	12号土壤墓	小型壺	円盤状平底		4	-	⑦	15/16 (1)	15/16 (4)	外面ヘラミ調整	弥生時代末期
27				12号土壤墓	小型鉢	尖底状平底		5	-					弥生時代末期
参考1	五斗長垣内	兵庫県淡路町		SH-202 (竪穴建物)	小型土器 (水差)	平底		4	-	①	74	59	外面にヘラミガキ	弥生時代後期
参考2				SH-203 (竪穴建物)	小型鉢か	平底	底径:4.2	4	-		74	67	外面にヘラミガキ	弥生時代後期
参考3				包含層	小型鉢	平底	底径:2.3	4	-		105	601		弥生時代後期

※各項目の表現は報告書を参考に記載。

第1表 底部貫通孔土器の集成

14は下郷遺跡(宮崎市)の竪穴状遺構25(弥生時代後期前葉～後葉)から出土した鉢型のミニチュア土器で内外面にミガキを施し、外面にはススの付着が見られる。脚状底部の付け根付近に孔径2mmの貫通孔を施す。孔口の形状は未確認である。

15は志戸平遺跡(新富町)のA5グリッドから出土した鉢で、内外面に丁寧なナデ調整を施す。底径2.8cmの円盤状底部に孔径4mmの貫通孔を施す。孔口は写真④・⑤のようになっており、穿孔法Bと思われる。

16は赤石遺跡(川南町)のD3グリッドから出土した小型甕の底部である。当遺跡の出土遺構から判断すると、時期は弥生時代中期～後期初頭に収まると推定される。内外面にナデ調整を施すが、風化が著しい。円盤状底部に孔径6mmと今回の資料の中で最大径の貫通孔を施す。孔口が写真④・⑤のようになっており、穿孔法Bと思われる。

17は八幡第2遺跡(川南町)の竪穴住居跡7(弥生時代後期後葉)の床上から出土した小壺で、内外面ミガキにて丁寧に整形している。7.5cmの器高に対し、貫通孔は孔径2mmと小さく、円盤状底

部と床との接地面際に施されている。孔口が写真④・⑤のようになっており、穿孔法Bと思われる。

18は赤坂遺跡（川南町）の3号周溝状遺構（弥生時代後期後葉～終末期）から出土した小型壺で、内外面に丁寧な工具ナデ・指ナデを施す。外面には胴部から底部にかけて広範囲に黒斑が見られる。器高は9.0cmで、底径2.3cmの円盤状底部に孔径4mmの貫通孔が施される。孔口が写真④・⑤のようになっており、穿孔法Bと思われる。

19は、湯牟田遺跡（川南町）の豎穴住居跡5（弥生時代後期後葉～終末期）から出土した小型の鉢で、内外面ともにナデを施す。底径1.2cmの円盤状底部に孔径5mmの貫通孔を施す。孔口の挿入口に写真②のような窄みは確認できないが、反対側の孔口がわずかにながら写真③のように見えることから、穿孔法Aと思われる。

20は俵石第2遺跡（都農町）の不明遺構（弥生時代終末期前半）から出土した小型の鉢で、内外面ともに工具ナデ・指ナデを施す。脚状底部に孔径5mmの貫通孔を施す。2つの孔のうち一つは破損していて全容が不明だが、一方の孔口は写真⑤のような工具の痕跡は見られないものの、実測図では、孔口がわずかにラッパ状に広がって見える。また、孔を見通したときに貫通孔がわずかに屈曲しているように見えることから、穿孔法Bの可能性がある。

21は山ノ田第1遺跡（都城市）のB-1区から出土したミニチュア壺型土製品である。内外面はナデにて調整し、外面は、丹塗りとなる。当遺跡の検出遺構から判断すると、時期は弥生時代終末期～古墳時代前期に収まると推定される。対象遺物の中で唯一の土製品で、丸底の底部に孔径3mmの貫通孔を施す。一方の孔口に明確な工具の痕跡が確認できることから、穿孔法Bと思われる。

22・23は祝吉遺跡（都城市）の7号豎穴住居跡から出土した小型の鉢型土器である。検出遺構から判断すると、時期は弥生時代終末期と推定される。22は、山ノ田第1遺跡出土（21）と類似する形態である。底部は丸底で、孔径4mmの貫通孔を施す。23は外面にナデを施し、円盤状底部には孔径4mmの貫通孔を施す。孔口の形状は未確認である。

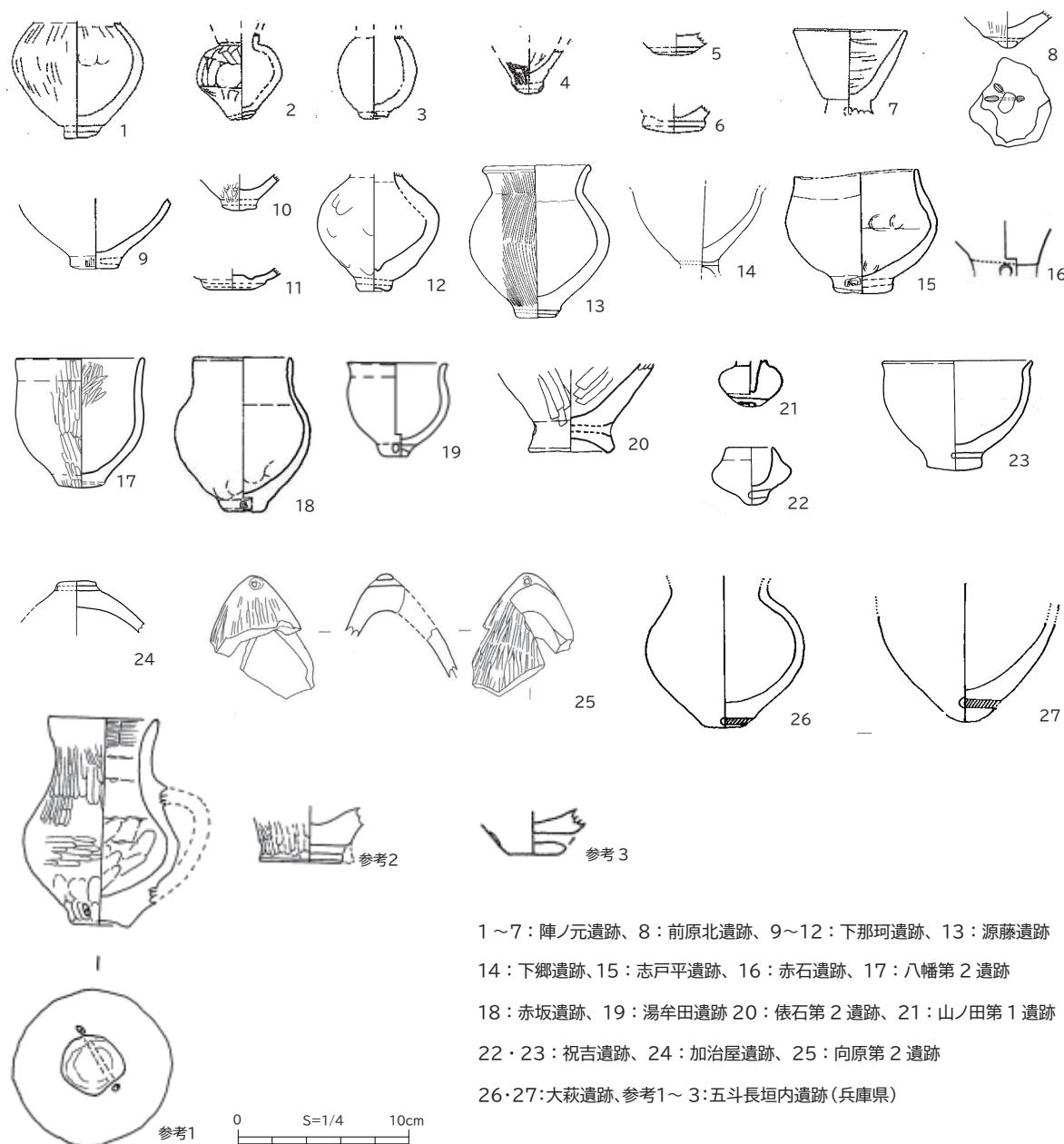
24は加治屋遺跡（都城市）のD-2区から出土したもので報告書では蓋の可能性を示唆している。外面はハケメ、内面にはナデを施す。当遺跡の検出遺構から判断すると、時期は弥生時代後半～終末期に収まると推定される。突出部に孔径4mmの貫通孔を施す。孔口の形状は未確認である。

25は向原第2遺跡（都城市）の7-C区から出土した小型の手づくね（ミニチュア）土器で先端部に孔径2mmの貫通孔を施す。報告書には「天地不明」との記載がある。内外面にミガキを施す。当遺跡の検出遺構から、時期は弥生時代後半～終末期に収まると推定される。24・25は他の類例から判断すると蓋ではなく小型壺もしくは鉢の底部に穿孔したものと考えられる。孔口の形状は未確認である。

26・27は大萩遺跡（小林市）の12号土壙墓（弥生時代末期）から出土した小型壺である。26は、外面にヘラミガキを施し、円盤状底部に口径4mmの貫通孔を施す。27は、尖底の底部に口径約5mmの貫通孔を施す。報告書には実測図のみで、写真・所見等は未掲載である。26・27ともに孔口の形状は未確認である。

4まとめ

前原北遺跡・下那珂遺跡において未掲載のものがあったことからも、他の遺跡でも同様に未報告・未精査資料があることは否めないが、全体としては少数のものであることは間違いないようである。出土16遺跡の分布は、現在のところ、宮崎県の日向灘沿い（宮崎市5遺跡、川南町4遺跡、新富町・都農町にそれぞれ1遺跡）、県南西部の都城市（4遺跡）・小林市（1遺跡）に広がり、地域



第2図 底部貫通孔土器実測図

的にまとまっている。

今回、底部貫通孔土器として集成した資料は、器高が3.3～9.0cmのミニチュアもしくは小型の土器がほとんどであり、中には、20や兵庫県出土の水差（参考1）のように9cmを超えるものも存在する。器形は壺型・鉢型が中心であり、ミガキやハケメなどで調整された丁寧なつくりのものも多い印象である。出土遺構は竪穴建物跡が10点と最も多く、土壙墓2点、竪穴状遺構・周溝状遺構がそれぞれ1点であった。孔径は2～4mmのものが多く、最大で6mmであった。時期は、13のように6世紀前葉から後葉まで下るものもあるが、多くは弥生時代終末から古墳時代前期までに収まるものと推定される。穿孔法については、穿孔法Bが突出して多いが、両側から穿孔しているものもあると確認できた。なお、貫通時に生じた工具痕等を丁寧に調整した上で焼成している場合も考え得るの

で、今回の穿孔法 A～C はあくまでも推定である。

用途については、いずれの報告書でも詳しくは書かれておらず、底部を天にして吊るして使用したとも考えられるが、実物や写真を観察してみても、紐の擦り痕などは確認できなかった。

5 おわりに

本稿では、宮崎県内の資料を取り扱ったが、他地域の報告書も全国遺跡報告書総覧などで検索してみると、五斗長垣内遺跡（兵庫県淡路市）で 3 点の出土例を知ることとなった。今後、県内外での出土例の増加を待ちたいが、兵庫県の出土例は瀬戸内系土器や絵画土器と同様の広がりを予感させるものである。このように当時の社会や地域間交流、土器の使用法の問題等、派生する課題は多く、今後も継続的に検討が必要である。

謝辞

本稿をまとめるにあたり、谷口武範氏、藤木聰氏に御教示、御指導を賜りました。文末ではありますが記して感謝を申し上げます。

【参考文献】

- ①淡路市教育委員会 2011『五斗長垣内遺跡発掘調査報告』淡路市埋蔵文化財調査報告書第 8 集
- ②都城市教育委員会 1982『祝吉遺跡』都城市文化財調査報告書第 2 集
- ③都城市教育委員会 1996『加治屋遺跡2』都城市文化財調査報告書第 35 集
- ④都城市教育委員会 2009『向原第 2 遺跡（第 3 次調査）』都城市文化財調査報告書第 92 集
- ⑤宮崎市教育委員会 1987『源藤遺跡』宮崎市文化財調査報告書
- ⑥宮崎市教育委員会 1999『下郷遺跡』宮崎市文化財調査報告書第 41 集
- ⑦宮崎県教育委員会 1974『大萩遺跡（1）』瀬戸ノ口地区特殊農地保全整備事業に伴なう埋蔵文化財発掘調査報告
- ⑧宮崎県教育委員会 1988『熊野原遺跡 A・B 地区 前原西遺跡、陣ノ内遺跡 前原南遺跡 前原北遺跡 今江城（仮称）跡 車坂西ノ城跡』「宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第 4 集」
- ⑨宮崎県教育委員会 1996『山ノ田第 1 遺跡』県道高城・山田線緊急道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
- ⑩宮崎県埋蔵文化財センター 2007『赤坂遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 151 集
- ⑪宮崎県埋蔵文化財センター 2001『志戸平遺跡（3 次）・頭田遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 46 集
- ⑫宮崎県埋蔵文化財センター 2004『下那珂遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 90 集
- ⑬宮崎県埋蔵文化財センター 2023『陣ノ元遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 269 集
- ⑭宮崎県埋蔵文化財センター 2009『住吉 B 遺跡・赤石遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 184 集
- ⑮宮崎県埋蔵文化財センター 2012『俵石第 1 遺跡（第 2 次調査）・俵石第 2 遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 216 集
- ⑯宮崎県埋蔵文化財センター 2007『八幡第 2 遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 148 集
- ⑰宮崎県埋蔵文化財センター 2007『湯牟田遺跡（2 次調査）』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 152 集

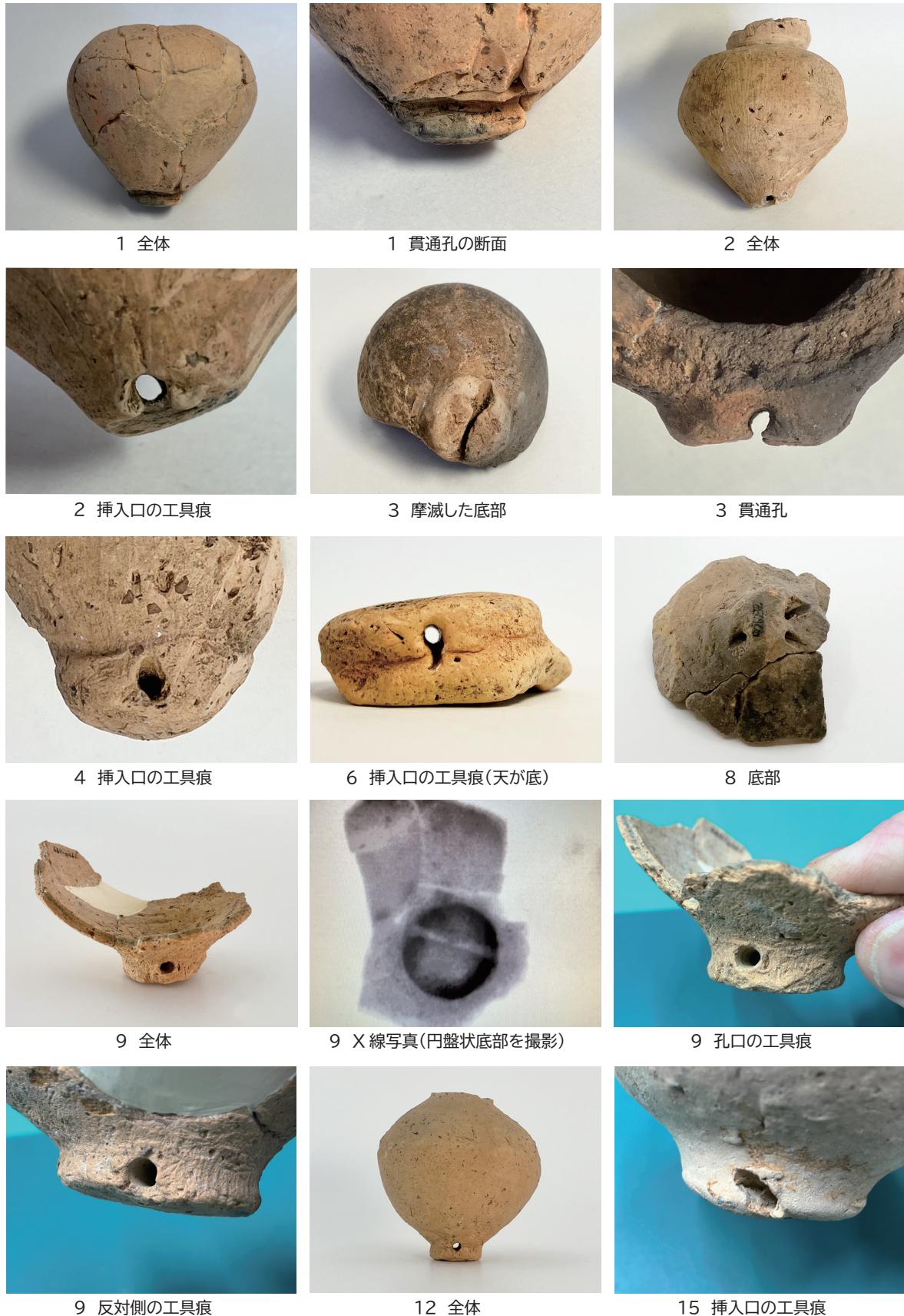
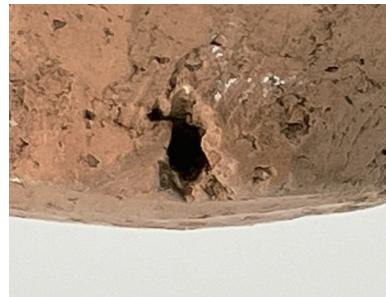


写真2 底部貫通孔土器(1)

※写真タイトルの数字は第2図の実測図と対応する。



17 全体



17 挿入口の工具痕



17 反対側の窄み



16 摩滅した底部



18 全体



18 挿入口の工具痕



19 全体の様子



19 挿入口



19 反対側



20 全体



20 貫通孔の見通し



21 全体



21 底部



21 孔の縁

写真2 底部貫通孔土器(2)

※写真タイトルの数字は第2図の実測図と対応する。